

## “人だま”は昆虫か？（5・9・18）

西岡 諄（昭12・理乙）

昭和十二年卒業の西岡でございます。本日は井垣さんからお電話を頂きまして、なにか話をせよということになりました。人だまの話でもいたしましょうということになったんでございますが、三高出身の諸賢のお耳を大変汚すことになろうかと存じますけれども、しばらくの間お付き合いを願います。

さて、金の玉と申しますと、大変ユーモラスで楽しい雰囲気が醸し出されるのでございますが、一方、金でなしに人だま、火の玉と、金が火になり人になりますと、なんとも言えない陰湿な空恐ろしい雰囲気が醸し出されるのでございます。これは何故でありますか。阪倉先生にでも聞いてみないと分りませんけれども、玉となって燃える火が、言い換えれば玉の火ですね。玉の火が魂になり、そして人だまになり、火の玉になったというふうには理解すると、何とか分かりそうな気がいたします。一方、玉となって燃える形で魂が浮遊するという考えは、日本だけではご

ございません。私はドイツの人に聞いてみました。そんなものありわしないと。フランスの人に聞きましたら、私はそういうことは知らない。カナダの人に聞きますと、やはり知らないと申します。アメリカの人に聞きますと、やはり知らないと申しますが、イギリスの人に聞きますと、いや、それはあるんだと。フェッチ・キャンドルというんだそうです。フェッチは Fetch、キャンドルはキャンドルであります。フェッチだけでもよろしいそうです。キャンドルを付けると大変丁寧になるそうですありますが、フェッチ・キャンドルと言いますのは、人が死にます時に、その人の魂がその人の墓場へ飛んで行くんだと。そういう考え方をイギリスの人は持っているようでございます。それなら、墓場のない人はどうなるんだらうと。私はいつも、そう思うんでありますが、それに対する彼の答はございませんでした。

他方、科学は科学と申しますと明治以後であります、要するに文明開化の産物として、科学というものが我々の頭に入るようになりましたけれども、この科学は燐が燃えると青い光を放つということを見出したのでございます。この二つの事実が無責任にも、また生半可にも結びついて、人だまの燐説がでっち上げられたのではなからうかと思うのでございます。ちなみに、人体のどこに燐が多いかと申しますと、脳、それから脊髄、言い換えれば中枢神経、そのほかに骨でございます。この三つに燐が多いんでございますが、この燐は勿論化合物として存在するのでありまして、単体の燐、言い換えれば燐そのものが存在するのではございません。ところが、この

化合物なる燐が自然現象のうちには単体の燐を遊離するということは考えられないこととさせていただきます。絶対に考えられないことと私は思うのであります。一步譲って遊離し得たとしましても、暗闇の中で認めるに足る光を放つためには三酸化燐を線て五酸化燐にならねばならないと思うのです。

ところが、燐というものは大変重いであります。原子量で申しますと31ぐらいでございますが、酸素の厚子量は16、窒素の厚子量は14であります。従って、大変重いと三高の半田教授の教えを受けたんでありますが、私共、三高時代には燐というものは金属と非金属の間であるというふうに教えられたと記憶しております。従って、これの酸化物もまた重いんであります、フワフワフワつと人だまのように、飛び歩くということとは決してございませぬ。むしろそれよりは、地面を這うに違いないと思うのでございます。しかも、燐がもし燃えたと致しますと、同じ色で燃えねばならない。ところが、私が四回見ておりますけれども、四回とも色が違うんであります。赤かったり青かったり黄色かったりといったように色が違うんであります、これは不思議なことだと思つたのであります。そして、燐が燃えると致しますれば、今年の夏の奥尻島、鹿児島あたりでたくさんの方が亡くなっておられますが、そのあたりに参りますと、人魂が燐ならば出て当り前であるうから、行って確かめたいと存じております。

尚、この中に人魂で四回見たというのは、私ぐらいではないかと思ひます。昔から夜遊びが好

きな私は夜、あちこち歩き回るうちに、人だまに遭遇したのでございますが、四回見た人、ございますか。ないとすれば、私が一番夜遊びが好きだということになります。それからですね、感動が短歌になったり俳句になったりするんですが、私の女房は短歌をやっております。そして、かつて俳句をやったこともございまして、我家には句集や歌集がたくさんございますが、それをいろいろ探してみましても、人だまの歌、或いは俳句というのは全然ございませぬ。これは時代の好みというものもあろうかと思えますけれども、どうやら近頃は、人だまが出ないのではなからうかと私は考えるわけであります。ところが近年、早稲田大学理工学部の大槻義彦教授が人だまに挑戦されました、これは空中放電であるということになっております。言い換えれば雷の子分である。いや、雷の子分が人だまであるということになります。もつと言い換えれば、大気中における電位差がこれを作るといふことでありまして、彼は雷が発生すると同じ条件でもって、人だまを人工的にこしらえました。ところが、その供覧する人だまの画像は私が見たものとは全く違つてございます。似ても似つかぬものと私は理解いたしました。それから空中放電であるとは彼は言うんでありますが、空中放電として昔から知られておる狐火やセントエルモの火。私は学生時代に伊豆の山の稜線を走る狐火を見たのでございます。それから軍医時代に北鮮の羅津から日本へ帰る船の中で帆船に立つセントエルモの火を見つけたのでございますが、人だまとは全く異なるものであると思いました。

さて、夜遊びの体験を申し上げますと、まず旧制中学三年生の夏であります。肝だめしというのが、昔ございましたね。肝だめしに真夜中に共同墓地を往復することを命ぜられました。その時には人だまは見なかったんでございますが、その翌日、風呂上がりの散歩の最中、約四メートル離れたところを、こぶし大の薄青白いのが川に沿って飛んだのでございます。この時は恐しくて身の毛もよだつ思いをいたしました。ちなみに、近所にお葬式はございませんでしたし、人の死んだという噂もなかったのでございます。私はこうしたことだけを日記に書いておりますが、当時の日記を繕ヒモトイてみますと、そういうことであります。

それから次は、三高一年生の夏、夕食後ふらりと散歩に出かけまして、そこで見たんであります。手が、手掌大、即ち直径10センチ大の赤味がかった橙色を呈しておりまして、ゆらりゆらりと隣家の屋根を越えて飛んだのであります。次は大学三年の夏でございまして、松江の旅館の縁側で見たのでございます。日記には8センチと書いてございます。くすんだ灰色がかった橙色である。これが塀の向こうに消えたのであります。最後の経験は五年前でございまして、総て夏のことでございますが、午前一時頃、私は自分の書斎から窓の外を眺めておりました。私の家は賀茂川の東岸にあります、川の西岸をずっと眺めておりますと、比較的速い速度で真っ青な、比較的小さい直径五センチ位であると私は理解しました。真っ青なのが、真っすぐ飛んで参りまして、そして隣家の塀を越えて見えなくなったのであります。初めの経験の際は、身の毛のよだつ思い

を致しましたために詳しいことは、はっきり覚えておられないでありますけども、三高の時代から以後は、人だまというものに大変興味を持ちましたので、これは何であろうかといういろいろ考えた次第でございます。従いまして、後の3回は間違いなしに人だまであると存じております。極めて明晰な意識のもとで、実際に見たのでありますから、人だまの存在は幻覚乃至錯覚として葬り去られるべきものではなからうと思うのでございます。

元来、日本における人だまの歴史は誠に古くて、また、大変多いんであります。これを大体、時代順に並べてみますと、次のようでございます。(まず、プリントご覧下さいますように)。万葉集、巻の十六の最後の歌であります。「人だまのさ青なる君がたゞひとり逢へりし雨夜は久しく思ほゆ」というのがあります。これはただ、それだけのことでありまして、真つ青なあいつに会ったあの晩のことは、恐ろしくて忘れられないという意味でありましょう。次に、伊勢物語の中に、「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深くみれば魂結びせよ」というのがございます。これは御存知の通り平安初期の歌人、在原業平の歌らしいのでありますが、第一百段に出ております。で、この「魂結び」という慣習はですね、これは次の藤原清輔の歌で御理解いただけると存じます。この人は平安末期の歌人でありますが、その「袋草子」の中に「魂は見つ主は誰とも知らねども結び止めよ下がひのつま」という歌が載っております。人だまを見た人は、自分から人だまが逃げるのを何とか防御するために、男なら左の、女なら右の袂を結びなさいと。そし

て、魂が飛ぶのを防ぎなさいというような習慣があったように思うのであります。それから、平安中期の更科日記、これは菅原孝標すけの娘の日記でありますが、歌人であり女流作家である彼女の日記に「いみじくも大きな人だまの立ちて京さまへなん来ぬる云々」という文章があります。でありますから、平安中期にも、こうした人だまが出たに違いないと私は断じております。

また最後の泉式部の歌であります、泉式部という方は、大変色恋の激しい人でありまして情熱家であります。4回男性と（4回以上でありましょうけど）少なくとも4回男性と交渉がありました。まずは橘道貞という人と結婚致しまして、それがうまくいきませんで離婚しております。その後、冷泉天皇の皇子の為尊親王、そして弟御の敦道親王、帥宮敦道親王というんであります。が、この二人と恋をしております。で、この歌は敦道親王とのいざこざのことを書き記した文の中に出ておまして、「ものを思へば沢を蛍もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」、恋をしたら、飛んでおる沢の蛍も自分の身から恋しい敦道親王の元へ飛んでいくんじゃないかと思われる、こういう意味であろうかと存するのであります。

それから、更に時代がずっと下りまして、近松門左衛門の曾根崎心中の中に、「お、あれこそ人だまよ。今宵死ぬるは我のみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな」「二つ連れ飛ぶ人だまよ、よその上と思ふかや。まさしう御身とわが魂よ」というのがございます。この二つ連れ飛ぶ人だまというのは、これ、私は見たことがございません。ペアで飛ぶ人だまなんて、見たこ

とがありません。これは不思議なであります。というよりも、これはフィクションであります。二つ連れ飛ぶ人だまになっていくだろうという彼の気持ちを伝えたものであろうと思うんでありますが、この様に古くは万葉の昔から平安朝、江戸時代に至るまで、人々によって人だまの歌あるいは文章が書かれておるといふことを私は確認した次第でございます、こういう点から人だまの本体を考えてみたいと思つたのでございます。

私の手掛りになるヒントといたしましては、まず出現季節が夏であるということであり、私の体験が皆、夏でありますし、それから私が手にした文献も皆、夏でございます。二番目には、戦後、ホリドール或いはパラチオン系の農薬が出現してから、その頻度が落ちたんではなからうか、出方がへつたのではなからうかと思つてあります。三番目には尾を引くということであり、これは風に吹かれて尾を引く、当り前のことかと思ひますが、尾の形が変化します。これは私が三回、明らかな意識の下に見ましたので、尾の形が変化したのを存じております。それから、大きさや色が様々である。鱗であるならば同じ色であるべきであります、それが様々であるということ。六番目には、落ちた所、着地点を見てまいりますと、多くの虫が居つたといふ文献がございます。これは江戸町奉行の経験者、根岸鎮衛の随筆集に「耳袋」といふのがあります。耳袋の中の巻六といふのに人だまの項といふのがありまして、人だま落下地点に虫が居り、これは「ぶゆ」であり、臭気を伴つたと書いてあります。それが「ぶゆ」即ち「ぶと」であるとするな



らば。臭気を伴う筈はありませんし、吸血虫でありますから集団即ち蚊柱を作りません。さて世界には「ぶと」は、五千種程ございます。その中で日本では約五百種類あるそうでございます。身長五ミリ位の虫ですが、恐らくは根岸氏の誤認であつて、ぶゆではなくて、集団を作る昆虫例えばユスリカの類等であろうかと愚考いたします。この虫の一匹一匹に発光バクテリアが寄生して、風に吹かれたら人だまになるんじゃないやなからうかと、思うのでございます。いかがでございますでしょうか。昆虫がどンドン減る今日この頃、富栄養化しておる川の水はアカムシユスリカ・オオユスリカの大変いい培養液でありましてこのユスリカの類が人だまの原因の一つではなからうかと思ひます。

私は日大の先生の空中放電説を否定するものではありません。私自身の申し述べるところも、これは間違ひなしに仮説でございますから、仮説をもって理論とするわけにはまいりません。どうか皆さん、そのように御理解願ひとう存じます。そう理解することによつて、人だまの持つあらゆる屬性が説明できるように思うのでございます。科学的証明を欠くという点で内心忸怩たるものがございますけれども、私は約八年間に亘つて人だまを求めて、目の細かい網を持って真夏夜にさ迷ひ歩いたのでございます。もし、人だまが出たら、ギャーと捕えて万葉人がさ青なる君と歌つた「人だま」の首実験をしたいと思つて私はやっただんでありますが、私が網を持つて外出しますと人だまは決して出ないんであります。不思議なことだと思つております。これが夜遊び

の一つの結論でございまして、どうぞどうか皆さん退屈なさったかと思えますけれども、お許し  
願いたいと思います。ありがとうございます。

(内科診療所長・前ノートルダム女子大学教授)